

## 卷 頭 言

### 學び、思い、そして實行に移すことについて

岡 本 正 三\*



独り鉄鋼の工業にのみ限つたことではなく、広く一般的問題にも触れることがらについて所感を述べてみたい。

時の経過は諸事万端を科学的發展の方向に導いていることは申すまでもないことであるが、一国の産業に対して少なからぬ影響を及ぼす所のその国の教育や制度が産業にとつてどの程度の適応性をもっているかは、国の將來の發展に関する重大な問題であらう。終戦後のわが国の教育や諸制度は戦前とは打つてかわつた可なり大きな變革をうけた。それらの變革の源を求めると自発的のものもあらうが、半ば他から強制されたものもあるようで、その中には苦しい目前の立場を糊塗せんとするのあまり、国情を考へることなく、また国の將來に思いをいたすことなくして決定されたと考へられるものも見受けられる。そうした大小さまざまの事柄が、あちこちに種種の矛盾と非能率化をうんでわが国の一層の貧困化に役立つてゐることは日常の新聞にも散見されていることである。

20世紀の後半に入つて、18世紀末の産業革命の規模とは比較にならぬ大規模の原子力を利用せんとする第2次産業革命が起らんとしている。これは真に驚嘆に値いすることで、かような發展に幻惑せられて、かの先進国の事柄が盛んに紹介せられたのは何よりであるが、それがわが国情や伝統を顧みることなくそのまま模倣されて、その結果は立往生というものも見受けられるのである。古い言葉に「溫故而知新」とある。この際改めて味うべき言葉ではなからうか。古語に「學んで思わざれば、即ち罔(くら)く、思つて學ばざれば、即ち殆(あや)うし」という。先進国に學ぶは必要なが、それを吟味せずして實行に移すは時に有害無益の結果をうむであらう。終戦後の委員会のあるものはかの国に學ぶに急に思つて、思ふこと至つて少い。それが實行に移される時は思わざるの欠陥を曝露して、案の練り直しという所に落ちこんで了う。學思双全、それを實踐にもつていつて初めて効果があがると考へる。

かの国に學ぶ問題とはちと異なるが、戦後漢字制限が行われ、専門用語の制定などが行われた。誠に結構なことであるが物によつては學問の後退ともいふべき種々の矛盾をうんで少なからざる困亂を生じた。漢字は意味をもつから一方の文字を他の文字をもつて代用することができない場合がある。たとえばよく問題となる熔と溶は、前者は火熱にとけるをいい、後者は水にとけるのであることは、古い文化

\* 東京工業大學教授、工博

の幼稚な時代より既に區別されていたことであり、このように全く異なる現象を表現する2字を溶1字にするの乱暴にはたゞ啞然とするのみである。これは冶金的、金属材料的問題が輕視されている結果であるともいえるのであつて、これを默認するのは学界の恥といつても過言ではなからう。強いて熔を棄てんとすれば字劃の簡単な且つ熔の意を示す他の字を創造するに如くはない。硬度が「かたさ」ならば溫度は「あつさ」、脆度は「もろさ」か。しかし、これらをとりたててかえる必要が何処にあるか。Brittleness が脆性なら Hardness は硬性か、Temperability が焼戻軟化性なら Hardenability は「焼入硬化性」とすべきである。英語でも Brittleness のごとく時に脆い度合を表わし、また時には脆い性質を表わして、両方の意味を混同して一字で示したものがある。しかしあいまいやガタの存在は、政治には必要かどうかは知らぬが、少くも学問や工業技術の問題では必要とは思えないから、改めるに憚かることはないであらう。

学，思双方あつての實踐こそ必要であることをくり返したい。